

## Garment Girls

バングラデシュの衣料工場で働く若い女工たち

### 映画上映会×トークイベント

2010年9月4日 お茶の水女子大学

☞ 映画上映前に会場の皆さんに質問しました。

Q: このイベントのどの部分に関心をもたれましたか? 挙手でお願いします。

A: バングラデシュに関心があって 約8割  
衣料産業 // 半分くらい  
映画 // 半分くらい  
トークセッション // 2割くらい

Q: ご職業や活動について。

A: 学生 2～3割  
市民活動関係 1～2割  
教員 約10人  
企業等にお勤め 6～7割

☞ 映画上映後、グループディスカッションをおこない、各班の感想を少しお聞きしました。

- ・低賃金の国での生産という経済的必然性に無力感を感じるとともに、バングラデシュの女性が家の外に出てきて自由になってきたことに驚いた。
- ・希望は感じたが混乱もした。

### トークセッション

藤岡: シャプラニールの藤岡です。2005年から2009年にバングラデシュに駐在していました。情報量の多い映画で混乱している人も多いのではないかと。簡単な自己紹介を。

黒田: CSO ネットワークの黒田です。バングラデシュについては素人です。

長田: お茶の水女子大学の長田です。専門は経済学とジェンダー研究。2006年にダッカ大学に1年留学。縫製工場の女性労働について研究しています。バングラデシュに初めて行ったのがシャプラニールのスタディツアーでした。

#### <縫製工場で働く女の子たちについて>

藤岡: まず、日本語訳をつけることになった経緯を。

黒田: 2009年国際交流基金と国際文化会館主催の「アジアリーダーシッププログラム」に参加して、この映画を作ったモカメル監督に出会った。以前から途上国の労働条件

改善の必要性を感じていたが、映画のもつパワーに衝撃を受け、日本での上映・日本語訳をつけることの許可をお願いしたところ快諾を得た。モカメル監督が日本にいる間にと急いで日本語訳をつけたので、読みにくいところもあり申し訳ない。今後改善していきたい。女工という言葉も使わない方が良かったと思っている。強いメッセージを出すのではなく色々な立場から考えられるよう中立的に作ったとのことだった。

藤岡：この映画の主人公、縫製工場ではたらく女の子たちはどんな人たちですか？

長田：お化粧やファッションに興味のあるごく普通の女性たち。家庭環境は一般的には貧しい。縫製工場は教育水準を問わないので、手先の器用な長時間労働にも耐えうる若い女の子が多い。

藤岡：バングラデシュに駐在中、農村にもよく行ったが、農村の女性は遠くに行ったり働いたりということはなかった。主人公のヌルジャハンに見られるように彼女たちの発言力の高まりを感じた。娘を送り出している両親の気持ちは？

長田：親御さんの率直な気持ちは聞き出せていないが、彼らの表情などから、娘が一人で都会に出て働くことに対して誇りのようなものを感じているのではないか。ふしだらな娘という感覚は無いと思う。

藤岡：実際、彼女たちのおかげで家計も助かっているわけですね。現在1タカ1.2円だが、2006年当時は1.6円くらいでした。今年最低賃金が3000タカと法律で定められましたが、この賃金についてはいかがでしょう。

長田：一月3000タカでは厳しいと思う。残業代もあるのでそれを含めると4500~5000タカはもらっていると思う。ただバイヤーや工場の事情で、定期的に約束した額がもらえるとは限らない。

藤岡：当時の月給2800タカ（約30ドル）と言っていたが、そのうち1000タカを実家に送り、家賃が650タカだと手元にはわずかのお金しか残らない計算になるが。

長田：近親者の家に居候している人や夫婦共働きの人もいる。

### <縫製工場について>

藤岡：なぜ今、衣料関係の生産工場が中国からバングラデシュに移っているのか？

長田：もともとバングラデシュは欧米向けの衣料品を生産し輸出していた。2008年の金融危機以降、中国の労賃が上昇、労働争議も起こるようになり、労働集約型のアパレル業にとっての環境は悪化した。バングラデシュは労賃が安く欧米向けファストファッションの実績もあるので日本企業も進出を始めた。

藤岡：植民地時代から靴下を作ったりしていた伝統もあるそうですね。工場を営んでいる人たちはどんな人たちですか？

長田：100%現地資本の工場もあれば外資が入っているところもある。日系資本の工場の場合、マネージャーレベルの人は全員男性。学歴は様々で現場からたたき上げの人も

いる。現地資本の工場では血縁や地縁によって経営者になっている人もいる。

藤岡：外資系の工場と現地資本の工場の違いは？

長田：現地資本の工場は規模が小さい。アパートのワンフロアにマシンを並べただけとか。外資系はダッカ郊外に大規模な工場を持っているケースが多い。日系工場は大きくてきれい。

藤岡：工場の入っていたビルが崩壊したというニュースが映画の中でありましたが。

長田：門に鍵がかかっていたというのは、不思議な気もするが、工場の安全管理という意味と布などの盗難防止のためだと一般には説明されている。

藤岡：そういえば、バングラデシュでは悪いものは外から来ると言ってよく外からカギをかけますね。

### <縫製工場の労働条件について>

藤岡：映画の中で、倫理的貿易の視点からのコメントや企業の監査についての話がありました。アパレル産業を含めたある種の産業の中で何がおきているのでしょうか？

黒田：安い商品の背後には、安く品質の良いものを求めるバイヤー⇒工場経営者⇒現場監督⇒労働者とつながるプレッシャーの連鎖があります。国境を超えるサプライチェーンの中で低価格・低コスト・低賃金の悪循環が生まれている。誰が悪いということではできない。

藤岡：日本企業からバングラデシュの工場への流通の仕組みはどうなっているのですか？

長田：メーカーは直接発注を出すのが、大手小売などは商社などを介して現地工場に発注したりするようだ。

藤岡：工場同士の競争も激しくなっているか？

長田：競争は激しい。競争の中で労働条件が改善していけばよいが…。欧米企業はもともと現地企業に発注している。

藤岡：カルフルの人々が、工場の労働条件はバングラデシュの問題であり、積極的な介入はしないとコメントしていましたが、企業の責任については今どのようにとらえられていますか？

黒田：企業が経済的な活動だけでなく、社会や環境への取り組みも経営の中に取り込んでいくことを企業の社会的責任（CSR:Corporate Social Responsibility）と呼びます。そしてその CSR の中でも取引先・生産委託先の安全や衛生等にも責任があるのではないかという、いわゆる CSR 調達の重要性が高まっています。調達の川上までさかのぼれるかという、その数の多さや複雑な構造もあって不可能ですが、第一次サプライヤーまでは気を配りましょうという流れにはなってきました。映画の中でも、社会監査が入る時には、事前に工場に連絡があり、皆で取り繕う場面がありました。工場側は調達企業からの過剰な注文や価格低下のプレッシャーがある一方で CSR の要請にも対応しなければならないわけです。調達企業からの一方

的なトップダウン的な取り組みには限界があるように感じます。サプライヤー側とバイヤー側が関係を深めて、サプライヤー側の視線に立った対応を考える必要があると思います。競争が厳しいので難しい部分もあると思いますが。

藤岡：児童労働はないということになっているが、小学生くらいの子が働いていた…。

長田：バングラデシュは小柄な人が多く、見た目と年齢が合っていないということも多い。日系企業は年齢に関しては厳しくチェックしている。書類でわからない場合は歯を見て判断すると聞く。

藤岡：ミシンで縫っている人の横に小さい子がすわり、縫い終わった服から出た糸を切っているシーンがあった。以前、“縫製工場で糸を切る仕事をしている”と聞いたことがあったが、映画を見てどんな仕事かがよくわかった。

長田：糸を切る人はヘルパーと呼ばれている。ヘルパーを3～5か月するとミシンのオペレーターになれると言われている。座って糸を切っているだけでなく、横で座ってミシン操作を学んでいることになっている。教育コストをかけずにミシンを覚えさせている。見ただけで服が縫えるようになる彼らの能力の高さにも感心する。

#### <ふりかえりシートの意見・感想に対して>

##### **意見・感想**

- ・こんなふうにファストファッションの服が作られているとは知らなかった。
- ・搾取であるとともに貴重な雇用創出
- ・メディアは良い面しか報道していないのでは
- ・消費者として自分たちは何ができるのか？

黒田：自分自身もあまり良いとはいえない。1990年代以降はグローバル化が進み、今私たちは海外で作られたものに囲まれて生活している。しかし商品の背景にまで想像力がはたらかない。北欧では学校で責任ある消費者であるための消費者教育がおこなわれていると聞いた。たとえば「危険なGパン」という教材では、自分たちのはいているGパンがどこで誰によって作られているか、捨てられたらどこへ行くのか、あるいはストーンウォッシュ加工のための薬品は環境や人体に影響はないのかなどについて、みんなで話し合うということだ。

藤岡：工場内での男女の役割は？

長田：様々な製造工程の中で、洗濯・裁断には男性が多く、縫製・仕上げ・たたみ・品質検査には女性が多い。

#### <会場からの質問とお答え>

Q:最近バングラデシュへ行き工場を見学した。工場環境は映画の時よりも良くなっているように感じた。労働者も普通の生活をしているような印象を受けた。彼女らは本当に

貧しいのか？貧しいとしても日本人として何かをすべきなのか？自分としては関与すべきではないと考えるが。

長田：彼女たちが貧しくて何も買えないということはない。何をすべきかということをごここで教師のように言うことは差し控えたいが、状況を知ることが大切だと思う。

黒田：モカメル監督が3年たってヌルジャハンに会いに行った時の話を聞いた。彼女は10歳は老けて見え元気がなくショックを受けたと言っていた。その話から現実には想像以上に厳しいのではないかと感じた。企業のCSRの取り組みに対して社会や消費者、株主は影響を及ぼすことができる。私たちはまずいろいろなことを知ることが必要だと思う。

藤岡：バングラデシュの女の子たちは皆明るいがかえって痛々しく感じられることもある。食事の量は少ないし、病気、特に結核が多い。送金の責任もある。見えない部分の大変さがある。日本人としては、まず自分の生活をふりかえるということではないか。大量消費や流行への志向、ファストファッションへの要求の高さなどがどこにつながっているかを考え、見直すことではないか。

Q: ①村から都会に出てくる時は誰を介して、またどこから情報を得て出てくるのか？②賃金を決めるステークホルダーのひとつである政府について、二大政党それぞれの考え方は？③ユニクロがバングラデシュの人たちのために安く服を提供すると言っているが、バングラデシュに行った時、外国から来た中古の服が街で大量に売られているのを見かけた。バングラデシュの人の服事情は？

①について

長田：ダッカ市内、地域の出身者がそれぞれ固まって住んでいる。そこを頼って来たり、家族や親戚が先に出てきていてそこに居候するというケースが多い。

②について

藤岡：2大政党はBMPとアマミ。どちらにも労組の支援組織があり、どちらが労働者の味方とはっきり言えない。アマミ政権が最低賃金法を変えたのでどちらかというアマミの方が労働者寄りかも。

③について

長田：この場でユニクロのことについて話すことはさしひかえたい。バングラデシュの男性はTシャツにGパン。女性は民族衣装、生地を買って仕立て屋さんで仕立ててもらおう。目指すは未開拓市場か。

Q:①女工という言葉は使わない方がよいのか？②ユニクロの労働条件等情報があれば教えてほしい③先月、縫製工場のストがあったと聞いた。労働運動の状況は？

①について

藤岡：女工という言葉にはもともと差別的意味合いはなかったと思われるが、使われているうちに差別的な色彩を帯びるようになったと考えてのこと。

②について

長田：ユニクロとグラミングループの提携が発表されたのはつい最近のこと。どのような活動を展開するかはこれからのことだと思う。

映画『ガーメント・ガールズ』は、非営利の教育目的に限り、(特活)シャプラニール＝市民による海外協力の会より有料で貸し出しています。